

# 思惟の論理と生活の論理

室 山 敏 昭

## 一 ものの体系かことばの体系か

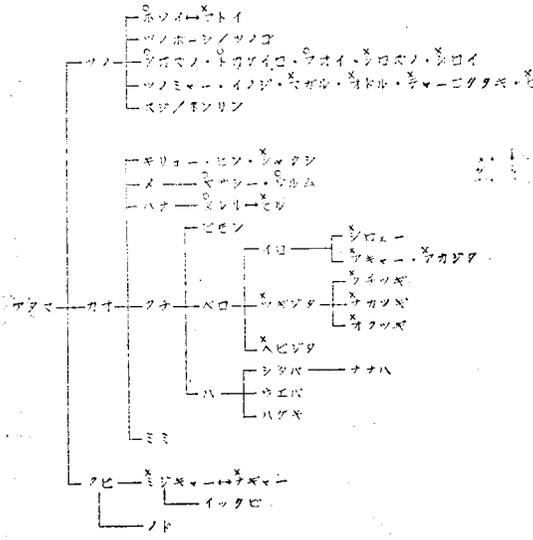
「フィールドの歩み——生活語研究の記録——」の第八号<sup>(半)</sup>に發表した拙論「但馬温泉町方言の『牛』の語彙——牛体に関する語彙を中心にして——」に対して、柴田武博士をはじめとして、何人かの研究者からコメントを頂いた。それは、一つに、拙論の最後に示した「牛体語彙」の立体的な体系図(これは、普通、階層的構造図あるいは枝分かれの図と呼ばれる)に関するものである。ここに、その一部を示す。

これに対して、柴田武博士をはじめとして何人かの方は、「この図は、ものの体系を示す図であって、語彙の体系を表示するとは言いがたい」という趣旨の批評を寄せられた。これと同様の批評は、また、吉田則夫氏が第二二回日本方言研究会の席上<sup>(注2)</sup>で發表された「身体部位の語彙における体系性と地域性」の身体部位の語彙の階層図に対しても、なされたとのことである。同氏の身体部位の語彙の階層図を、参考までに示す。

さて、右の「ものの体系」が、もし、客観的实在、物的实在としての「ものの体系」を指して言われているのなら、これに対しては、すぐにも次のような疑問がわくであろう。純粹な物的实在は、

いわば、名もない混沌とした世界のものであって、ことばの体系に對置され得るとき価値は、いささかも有さないものではなからうか。「もの」が、真に「もの」としての存在価値を具有することになるのは、我々が、その「もの」を「もの」として意識し、主体的な関心を寄せることによってではないだろうか。これについては、すでに早く、和辻哲郎に次のような論がある。「我々は寒さを感じず前に寒気というごときものの独立の有をいかにして知るのであるうか。それは不可能である。我々は寒さを感じることに於いて寒気を見いだすのである。しかもその寒気が外に於いて我々に迫り来ると考えるのは、志向的関係についての誤解にはかならない。元來志向的関係は外より客観が迫り来ることによって初めて生ずるのではない。個人的意識について考察せられる限り、主観はそれ自身の内に志向的構造を持ち、主観としてすでに、「何ものかに向ける」ものである。「寒さを感じる」というその「感じ」は、寒気に向かつて関係を起す一つの「点」なのではなく、「……を感じる」こととしてそれ自身すでに関係であり、この関係において、寒さが見いだされるのである。」(「風土 人間学的考察」八頁) 厳密に言えば、自然界には、色も音も香もない。存在するのは、物理的または化学的なプロセスにすぎない。それが、人の感覚器官を通して、人間的に

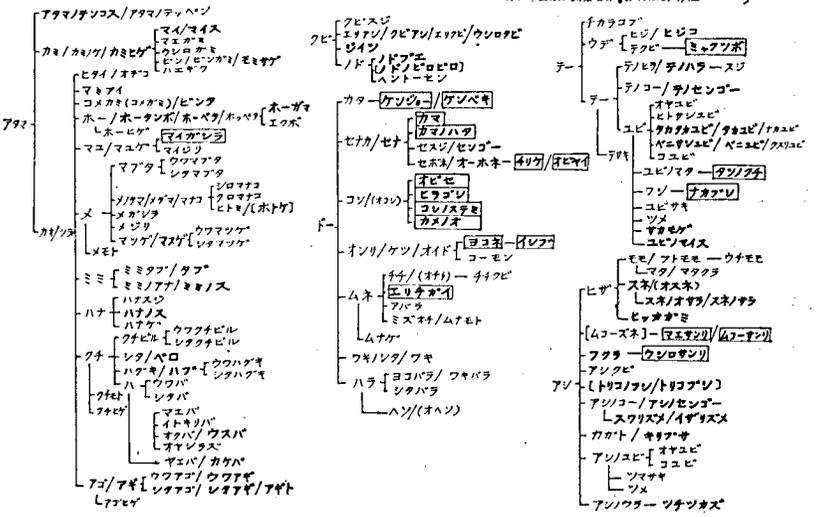
/ 可畏明語 ↔ 夷畏明語  
 ○ 他式      × 他式  
 <兵庫県美作郡三好町有馬村の方言——ワノマ(類)の語彙——>



把握されることによって、はじめて実在となるのである。人が認識してはじめて、「もの」は「もの」としての実在性を獲得し、その所を得ると考えられる。  
 また、物的実在としての単なるこのもの、そのものは、我々が主

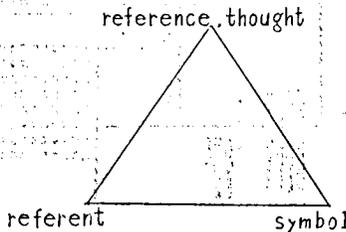
語彙表 [1] 高知県吾川郡伊野町三川東谷方言の身延部位語彙

【ゴレンフで示すものは普通語例(例)の方言名(例)】  
【ワノマ(類)の方言名(例)】



体的関心を寄せ、頭の中で相互の関係づけを行なわなにかぎり、人間にとって、それぞれは、まったくバラバラの存在でしかなく、そこに、前もって必然的な関係が備わっていると考えることはできない。ものに、いかにも体系があるように見えるのは、日常生活の中に、既に取り込まれたものをそれぞれの場において見ているからであって、構造体——機能的統一<sup>(註)</sup>の一要素として把握されているがためである。家という構造体において、材木が、やがて天井となり床柱となり鴨居となり、さらには遠棚となつて、相互に必然的な機能的関係をもつて存在しているそのそれぞれのもと、材木以前の山に生えている単なる木とは、もはや決して、同一の「もの」ではないのである。

このようであるから、おそらく、柴田博士をはじめとして何人かの研究者の言われる「ものの体系」の「もの」は、単なる物的実在としての「もの」ではなく、我々が主体的関心を寄せることによつて、すでに意識の中に取り込まれた「もの」なわけである。Ogden-Richards が『意味の意味』(一九二三)の中で、例の意味三角図によつて、下の図の



ように示した 'reference' に相当する「もの」と考えるべきであらう。<sup>(註)</sup> さて、この意味での指示物は、それぞれがその部所部所に適切に配置されることによつてはじめて、一定の価値とまとまりを示すこ

とになる。しかし、それがただちに体系になるのではなく、ことばを通して体系が見えてくるのである。換言すれば、ことばに支えられて、「もの」全体の体系が把握されると考えなければならぬ。すなわち、「もの」の体系は、決して「ことばの体系」に對置せしめられるような対立項ではなく、「ことばの体系」を通してはじめてその構造が明瞭になつてくる、いわば、「ことば」以後のものであると考えられるのである。

また、「もの」はなにによつて把握され、なにによつて表出されるか。それは、「ことば」によつてしかとらえることができず、また表わし得ようもないのではないか。となれば、結局のところ、我は「ことば」によつて「もの」を理解し、把握しているわけである。したがつて、「もの」の体系は、「ことば」で把握する以前にすでに、一定の体系を備えて存在していると考えることはできず、「ことば」に表現され、「ことば」を通して組織化されることによつて、それが、いかにも体系を有しているかのように見えてくるものである。これは、「ことば」に体系があり、それを借りて見ているからに外ならず、「もの」の体系は、「ことば」の体系によつてはじめて定位されることになるのである。「もの」の体系が、「ことば」の体系以後のものであると言つたのは、実は、この意味においてである。ことば(言語)ともの(言語外現実)との関係を、青柳精三氏は、私の「鳥取県気高郡気高町姫路方言の方位潮流語彙」の実態に即して、次のように図示された。<sup>(註)</sup>

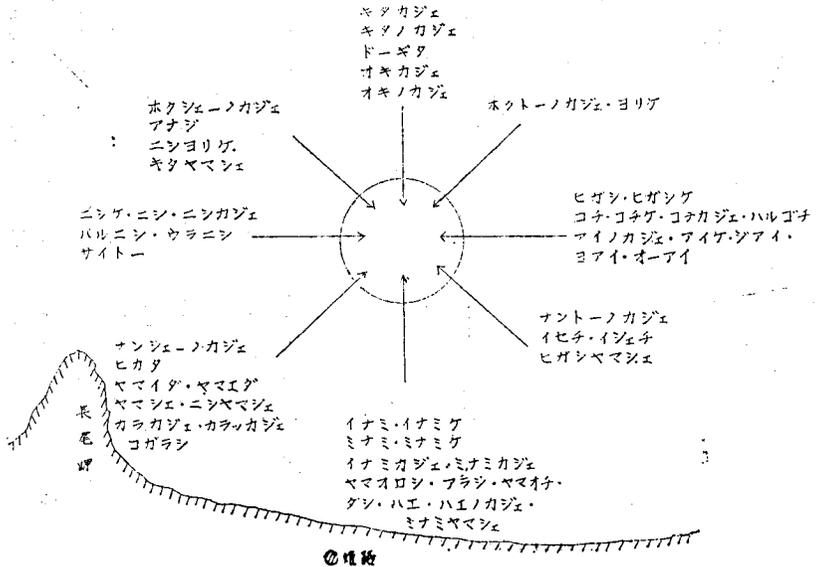
「言語」と「言語外現実」との関係について、B. L. Whorf は、「世界は、万華鏡のような印象の流れの形で現われているのであり、







く漁業系方言部次高町産語方言の場合



られているとするならば、「風位語彙」の実態が、漁業社会と農業社会とで大きく相違することは、考えにくいことであろう。まして、同じ漁業社会においてさえ、「方位潮流の語彙」が大きく異なっているということは、きわめて考えにくいことである。仮に、ここで一步譲って、「生活」の外に「もの」の体系があると考へ得たにしても、この、現実に認められる大きな相違をいかに説明すればよいであろうか。

このように見てくると、ことばの体系、生活語彙の体系以外に、「ものの体系」などがあるのではなく、あるのは、ただ、ことばの体系、生活語彙の体系だけであり、しかも、それは、つねに生活に支えられ、生活に密着して存立していると言わなければならぬ。ただ、ここで、私は、言語が世界認識のすべてを決定するということを言おうとしているわけではないことを断っておかなければならない。サピアー・ウォーフの仮説や、ヴァイスゲルバーの仮説をはじめとして、たとえば、E・パンヴェニストが「言語は現実を再生産する。このことは、もつとも厳密な字義どおりに解さねばならぬのである。現実には、言語という代弁者によって、あらためて生産しなおされるわけだ……言語学者としては、言語なき思维など存在し得ず、したがって世界認識はその受けとる言語表現によって決定されている、とみなさねばならない。言語は世界を再生産するがそれは世界をおのれ自身の組織に従わせることによってなのだ」と強調するがごとき言語決定説の立場に立とうとしているわけではない。

言語が、人間の思考や精神の深い部分と離れがたく結びついていることは確かな事実であり、それを証する事実が多い。これが、言

語の重要な一面であることは確かであるが、しかし、思考にしても心理にしても、その本質は、内的に言語を超えている部分があり、言語ではとらえきれない剰余が存しているように思われる。私は、むしろ、言語が、言語外の要素からどのような影響を受け、どのように依存しているかという見方に立つ。すなわち、言語の前に、生活の必然性に支えられた生活経験の論理を仮設しようと考えるのである。そうしなければ、先の「潮の語彙」や「風の語彙」の上に認められる大きな相違を、合理的に説明することができないように思われる。言語によって、人間が一方的に規制されるのではなく、言語に対して、人間が、主体的に振舞う面が一方に確かに存すると考えるのである。しかし、今は、この問題にはこれ以上深入りしない。

ところで、「ものの体系」か「ことばの体系」(生活語彙の体系)かという疑問が出てくるさらに一つの理由として——あるいは、これが最も大きな理由かも知れないが——、我々の言う生活語彙の体系が、その末端部分に至るまで、意味的につねに二項対立(あるいは、同一性・類似性・連合・相関など)の關係が認められるか、という疑問である。我々が示す生活語彙の体系には、欠けた部分(すきま)や直線的な構造が存し、また対応關係の見出しにくい部分もかなり存している。しかも、純粹に意味の対応、対立關係に即して語彙の排列を行なっておらず、暗黙のうちに、非言語的な概念的操作や生活に対する配慮が入りこんでしまい、場合によっては、単に羅列と呼ぶべき部分もかなり多いのではないかという疑問である。つねに、厳密に、二項対立、対応の概念に支えられていなければ、体系を認めないとする考え方の上に立つならば、現実の生活語彙の

全体を、その末端部分に至るまで、整然と体系的に分類排列しきることとは、おそらくできないであろう。

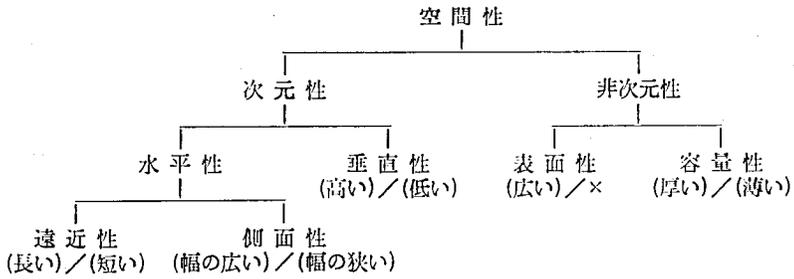
この問題について、以下に、検討を加えることにする。

## 二 思维的論理と生活の論理

語彙を構造的意味論の立場からとらえようとする際、最も重視されるのが、対立の概念である。ある語彙場における各要素は、一つの共有の特徴と一つ以上の弁別の特徴によって、關係の網として存立している。しかも、弁別の特徴は、相互に、上位・下位の關係を示し、それによって、各要素は、階層的にしかるべき位置を与えられ、価値づけがなされる。語彙場における要素、語彙素の意味は、階層的構造の全体における位置と、他の語彙素との關係に基づいて定義されることになる。

その具体例を、A. J. Greimas の *Semantique structure* (一九六六年)の中から、一つだけ挙げる。

A. J. Greimasによれば、すべての語彙素は、一定数の意義特徴の存在と他の意義特徴の不在とによって特徴づけられる。しかも、語彙素は、意義特徴の単なる集合ではなく、相互に階層的關係に立つ意義特徴の全体である。語彙素の内部には、「異質の意味体系に属する意義特徴間の階層的關係」がある。意義特徴を一元的に処理しないで、階層的に価値づけて示したところに、Greimasの貢献がある。ここで大切なことは、意義特徴が、非言語的な概念の連続性に頼って帰納されること、すなわち、「言語表現自体の中には、それが、そのままの姿では表出されることがなく、しかも、容易には



	空間性	次元性	垂直性	水平性	遠近性	側面性
高	+	+	+	-	-	-
低	+	+	+	-	-	-
長	+	+	+	+	+	-
短	+	+	+	+	+	-
幅の広い	+	+	+	+	+	+
幅の狭い	+	+	+	+	+	+
広	+	-				
厚	+	-				

客観的な形で見定めることができない」ということであるという。このような考えかたは、フランスでとくに発達し、A. J. Greimas 以外にも Coseriu, Potter, Mounin などの業績が、よく知られている。ところで、この方法は、外延性の明確なある限られた語彙場（閉集合体）に対しては、かなりの効力を発揮するが、包含する領域が広い範囲に及ぶ生活語彙の全体に対しては、この方法による意味の構造化には、最初から大きな限界が存すると言わなければならない。ひとつの言語の意味体系——それが表示する意義の総体を体系的に記述することは、その言語によって表現される「文化の内容の総体」を研究することにはかならず、その文化の内容の総体的構造が、いかなる特質を具有するかを発見しようとする試みに発展するものである。この包含する世界の広さのゆえんに、意味の構造化の可能性は、長く疑問視されてきたのである。

二項対立の考え方で、生活語彙の全体を、厳密に排列しきろうとすると、語彙体系の上位レベル（分類の大きな柱）はともかく、下位のレベル（上位レベルの下に階層的に枝分かれする下位体系）へ降りていくに従って、——語彙素の数が次第に多くなり、語彙素相互の関係が複雑になるに従って——次第に客観的な基準に基づいて排列しきることが困難になってくる。有意的な弁別の特徴を見出すことがむづかしくなり、しかも、弁別の特徴相互の関係が、きわめて複雑になってくるからである。

生活語彙を、構造的意味論の方法で分類しきることの困難さは、それだけにとどまらない。生活語彙の意味体系が、つねに均斉のとれた体系、理想的な分布を示すものではないという現実が存する。



必然性が存するのである。その上、これら出世魚の逐一に認められる語彙素相互の意味的関係は、二項対立の関係ではなく、直線的構造になっているのである。また、例えば、兵庫県養父郡養父町方言の「病蚕」について言えば、病気の違ひによって、「ウミコ」(膿蚕)「シラコ」(白蚕)「ジジ」(爺、体全体が黒っぽくなり、最後にはつぶれてしまう恐ろしい病気)など、いろいろの言いかたが認められるが、健康な蚕については、特別な呼称が全く認められないといった例もある。さらには、共通語においては、「大波」に対する反義語は「さざ波」であるが、京都府奥丹後半島においては、(オーナミ↑↑コナミ)／チューナミという二重の二項対立が認められ、生活の必要性に基づく細分化が行なわれている。

このように、生活語彙の体系は、いろいろの面で、矛盾や欠落やときには贅物を具有している。これは、とりもおさず、「生活語彙」が、思惟の論理ではなく、長い生活経験の中から生み出された「生活の論理」によって支えられていることを意味するものである。したがって、「生活語彙」の体系に、全く、矛盾や欠落のない完全な体系を求めることはそもそも無理なのであって、むしろ、「そのようなさまざまな矛盾や欠落や贅物を含むものが、生活語彙の体系である」という前提的認識に立って、そこから出発していくことがなによりも大切ではないかと考える。そして、理論的には、理想的な分布を示しているとは言えないそのような体系の意味を、生活の実態に即して、できるかぎり深く省察することが、生活語彙の研究にとって、きわめて重要な課題になってくると考えるのである。そのような「生活語彙」の体系に即して、地域の生活構造、換言すれば

地域文化の構造の特色を解明し、土地の人びとの生活意識、外界認識の体系を究明して、「言語」と「生活」との関わりを、全面的に記述し尽くすことが、生活語彙研究における最も重要でかつ最終的な自己目的でなければならぬ。

そのためには、一々の語彙素を、弁別の特徴(意義素性)によって区別し、その全体における位置を明確にするだけでなく、一々の語彙素の生活意味(日々の生活の中であって、その語の象徴が、いかなる価値と意味を持っているかを、土地の人々の生活実感に即して把握する)を解明し、まず、第一に下位レベルにおける語彙素集合体の一々について、グループごとの(たとえば、「出世魚」なら「出世魚」の領域内というように、語彙の小さな一々のまとまりに依じて)生活意味構造を究明することが、ぜひとも必要になってくる。具体的な例を挙げれば、たとえば「潮境」のことを、鳥取県の東部や中部地方では、「ギラ」(シオザカイ・シヨメ・シヨゼとも言う)と言うが、それには、「タテギラ」「ボタンギラ」という、漁にとって好ましくない下位名称が認められて、好ましい名称は認められない(現象としては存するが)。「牛体語彙」の「尻」に関する下位分野語彙一つを見ても、「アジカジリ」「ポーブラジリ」「ケツカバタ」「バラオ」「マキオ」「ヘビオ」(いずれも、兵庫県美方郡温泉町方言のもの)など、牛の肉質や品について、好ましくないものが数多く採えているのである。すなわち、マイナスの方向に語彙が栄え、それに対立するプラスの方向の語彙は認めにくいという事実が存する。このような事実は、「風位語彙」や「性向語彙」(人の性格や行動癖を表現する語彙)などにおいても、同じように認められ

る。

なぜ、このようであるかを解明することが、すなわち、生活意味構造の解明であり、これの積み重ねによって、地方人の生活意識、認識の仕方の構造的な特色を、具体的に解明することが可能になってくるであろう。言いかえれば、「生活語彙」の体系を、生活の必然性との関わりにおいて把握、究明し、その上で、「生活語彙体系」を支える原理——生活の論理——を考察することによって、日本の地域社会に生きる人びとの生活意識の構造や生活認識の構造の特色、ひいては地域文化の構造的な特色を、全体的に解明するための具体的な手がかりが得られることになる。このことが、「生活語彙の研究」の最終的な課題とされよう。それが、「言語社会学」あるいは「言語人類学」の領域と大きく重なり合うことになるのは、むしろ、「方言語彙学」の自己発展と考えるべきであろう。

### 三 語彙に体系は存するか

ところで、柴田武博士をはじめとする数人の研究者は、筆者に対して、「語彙に体系が認められるかどうか、疑問に思う」旨の批判も寄せられた。この問題は、第二節の「生活語彙」の体系をどう考えるかという問題とも関連することであり、また、「生活語彙」の体系を、どのように帰納し、確定するかの方法論的モデルを考える前に、まず明確にしておかなければならない問題でもある。

筆者は、語彙の体系は、志向すべきものであって、疑うべき存在とは考えない。語彙も、その時と所を限定すれば、それは、つねに、有限の存在として把握されるはずのものである。また、言語が、ソ

シュールの言うように、有機的統一、体系的存在であるならば、音韻と文法とに体系が認められて、ひとりで語彙（→意味）だけに体系が認められないと考えることはできない。語彙を語彙統体として、文字どおり体系的存在として把握する（→記述する）ことにまだ成功していないということ、語彙には体系が認められないとすることは、全く別の次元の問題である。今は、語彙の体系を求めて、ひたすら、理論・実証の両面から研究を積み重ねるべきときではなからうか。このことについては、すでに、拙著「方言副詞語彙の基礎的研究」の中で詳述したので、それに譲りたい。

さて、「生活語彙」の体系を、正しく帰納するためには、そのための方法的なモデルが仮設されなければならない。しかし、その基本には、「語彙は生活語彙である」という理念と、「語彙記述は分類にきわまる、分類が生命線であるとも言えよう。その分類は、「生活」を見る目によってなされるべきものである。——「生活」の原理とでも言ううるものが、ここにあるはずである。」という考えかたが、つねに存していなければならない。この理念が、生活語彙研究の基盤にしっかりと据えられていなければならないであろう。いかに、科学的、客観的な方法であっても、それがすでに最初から全体のきわめて限られた部分にしか適用できないことが予想されるような方法は、生活語彙研究の対象が、きわめて広大なものであるだけに、決して有効な方法とは言えないであろう。したがって、生活語彙の分類方法として、まずもって重視されなければならないことは、広大な領域のすべてに適用しうる方法を、確立するということである。そのためには、まず、「土地の生活に直結した分類網を

張ることが必要とされる<sup>(注16)</sup>。そして、「生活語彙」の統一体を、「生活場面に基づく分類法」によって、分類することである。したがって、生活語彙全体を、まず、

1、生活場面に基づいて分類する。

ことが、第一次の作業としてなされなければならない。「生活場面」は、大きく、次のように分立される<sup>(注17)</sup>。

(1) 生業語彙

a、農業語彙

b、漁業語彙

c、商業語彙

(2) 衣食住語彙

a、住の語彙

b、食の語彙

c、衣の語彙

(3) 家庭族縁語彙

a、家庭語彙

b、族縁語彙

(4) 村落社会語彙

a、人間語彙

b、交際語彙

c、冠婚葬祭語彙

d、年中行事語彙

(5) 生活環境語彙

a、自然環境語彙

b、天文氣象曆時語彙

c、動植物語彙

(6) 生活一般語彙

a、助辭語彙

b、獨立詞語彙

c、副詞語彙

d、名詞語彙

e、數詞語彙

f、代名詞語彙

g、動詞語彙

h、形容詞語彙

i、形容動詞語彙

この分類網は、すべての方言社会の語彙に適用しうる、かなり抽象度の高いものと考えられる。この分類網の(1)、(2)、(3)、……のレベルを第一次レベル(最上位レベル)と称し、a、b、……のレベルを第二次レベルと称することにす。第二次レベルの下位レベルである第三次レベルの分類も、「自然環境語彙」も含めて、すべて「生活を見る目」「具体的な語彙生活分野の解析」によってなされる。今、試みに、鳥取県気高郡気高町姫路方言の漁業語彙の分類体系を示す。これは、右の分類体系の(1)のbに属するものである。

一、漁業語彙

1、漁場に関する語彙

2、海の語彙

3、風の語彙

- (1) 風そのものに関する語彙
- (2) 風の性質に関する語彙
- (3) 風位語彙

イ、北東、ロ、東、ハ、南東、ニ、南、ホ、南西、ヘ、西  
下、北西、チ、北

#### 4、波の語彙

- (1) 波そのものに関する語彙
- (2) 波の大小に関する語彙
- (3) 波の種類に関する語彙
- (4) 波の部分名称
- (5) 波と風との関係に関する語彙

#### 5、潮の語彙

- (1) 潮一般に関する語彙
- (2) 潮の名称

#### 6、灘と沖の語彙

#### 7、浜の語彙

#### 8、磯の語彙

#### 9、瀬の語彙

#### 10、岬の語彙

### 二、漁期語彙

#### 1、漁期に関する語彙

- (1) 春の語彙
- (2) 夏の語彙
- (3) 秋の語彙

- (4) 冬の語彙
- (5) 年中の語彙

### 三、漁法語彙

#### 1、漁法一般に関する語彙

#### 2、地引き網漁の語彙

#### A、魚見語彙

- (1) 魚見台語彙
- (2) 魚見役語彙
- (3) 魚見語彙

イ、魚群語彙、ロ、魚見語彙

#### (4) 合図語彙

イ、合図語彙、ロ、旗の語彙

#### B、網舟の準備語彙

- (1) 網の準備に関する語彙
- (2) 舟おろしに関する語彙

#### C、網打ち語彙

- (1) 網打ちの分担に関する語彙
- (2) 網打ちに関する語彙
- (3) 魚群と網に関する語彙
- (4) 網の種類に関する語彙

#### D、網引き語彙

- (1) 網引き語彙
- (2) 網の引き手に関する語彙

#### E、舟据え語彙

F、網干し語彙

3、磯見漁語彙

(1) 磯見漁に関する語彙

(2) 漁法に関する語彙

(3) 漁と自然環境に関する語彙

(4) 磯見漁師語彙

四、漁具語彙

1、網の語彙

A、網の語彙

(1) 網語彙

(2) 網の種類に関する語彙

イ、材質による網の種類語彙

語彙

(3) 網の部分名称

(4) 網づくり語彙

(5) 洗染め語彙

B、網の手入れ語彙

C、網小屋語彙

2、舟の語彙

A、舟の語彙

(1) 舟一般に関する語彙

(2) 舟の種類に関する語彙

(3) 舟の部分名称

B、舟小屋語彙

C、操舟語彙

五、漁獲物語彙

1、魚類語彙

(1) 魚一般に関する語彙

(2) 年齢による魚の名称

(3) 居場所による魚の名称

(4) 地引き網漁でとれる魚の名称

イ、春、口、夏、ハ、秋、ニ、冬

(5) 磯見漁でとれる魚の名称

イ、春、口、夏、ハ、秋、ニ、冬、ホ、年中

(5) 沖に居る魚の名称

2、魚類以外の漁獲物語彙

六、漁獲配分語彙

1、漁獲高語彙

2、分配語彙

3、販売語彙

(1) 商いの語彙

(2) 運搬の語彙

七、加工語彙

1、煮干し語彙

2、酢づけ語彙

3、干し魚語彙

4、塩魚の語彙

5、わかめ干しの語彙

## 八、漁師語彙

### 1、組織語彙

(1) 漁師の呼称

(2) 組織に関する語彙

イ、網の仲間語彙　ロ、組織の語彙　ハ、寄合の語彙

ニ、漁業協同組合の語彙

2 風俗・信仰・労働歌に関する語彙

(1) 風俗に関する語彙

(2) 信仰に関する語彙

(3) 労働歌に関する語彙

## 九、海での災害語彙

この第三次レベルのIの5「潮の語彙」の分類網は、さらに、以下のよう  
に細分される。これも、やはり、生活語彙の実態に即して、「生活の目」  
によって立てられるものである。この細分類も、第三次レベルに属するものである。

### 一、潮そのもの

### 二、潮の動き

1、潮の動き一般

(1) 潮の動きそのもの

### 2、潮流

(1) 潮流の方位

A、沖の潮

a、西→東

B、灘の潮

a、西→東

b、東→西

(2) 潮流の陸地との関係

A、出潮

B、寄り潮

(3) 潮流の状態・変化

A、潮の接線

B、潮の先端

C、潮の変化

D、潮の上下

(4) 潮の干満

### 三、潮の状態・性質

1、潮の状態（大小・強弱）

2、潮の性質（良し悪し）

### 四、潮と風

したがって、

2、第一次レベルから第三次レベルまでの分類網は、すべて、  
生活実態の分析に基づく生活の目によって立てられなけれ  
ばならない。

こととなる。第一次レベルから第三次レベルまでは、大きく、

3、生活直結レベルの分類網で一貫する。

ことが要求され、また、そうでなければ、生活語彙を分類しきること  
とはできない。

さて、第三次レベルにつづく第四次レベル以下は、「農業語彙」

の中の「牛の飼育語彙」の「牛体語彙」（最初に示した階層的体系図）についていえば、たとえは、「頭」の語彙の中の「口」以下のレベルが、それに相当することになる。

4、第一次レベルから第三次レベルまでが、やや抽象度の高い上位レベルであるのに対して、第四次レベル以下は、かなり具体度の高い下位レベルである。

土地土地の生活語彙の体系上の特色は、この下位レベルに、最もいちじるしく反映すると考えられる。ここにおいて、「生活語意味論」（→構造の意味論を下部構造とする）が、とくに積極的に適用されなければならない。したがって、

5、第一次レベルから第三次レベルまでを、「生活分野レベル」と仮称し、第四次レベル以下を、「意味構造レベル」と仮称する。

こともできる。しかし、最上位のレベルから最下位のレベルまで、「生活の目」で、一貫した分類を行なうわけであるから、両者の関係は、決して異質的な関係ではなく、下位のいくつかのまとまりが、そのまま上位のレベルに包含される形で、発展的に拡大していく関係にある。ただ、作業手順のモデルとして、生活分野分析のレベルと語彙素相互の関係のレベルとを、一応区別しておくことが、筆者の今までの語彙分類、語彙記述の経験から、方法的に有効ではないかと考えるのである。

この際、上位から下位への立体的分析を展開するか、下位から上位への包摂的統一を試行するかが問題とされるが、下位レベルのまとまりを、真に一つのまとまりとして把握するためには、どうして

も、他のまとまりとの関係が正しく把握されていることが前提とされるから、語彙の分類は、上位から下位への立体的分析の方向で進めることが、もっとも合理的であると考えられる。したがって、

6、生活語彙の分類は、上位レベルから下位レベルへと、順次階層的（→枝分かれの）に分析が進められなければならない。ない。

ことになる。

下位レベルにおいて、二つ以上の語彙素群が、相互に均斉のとれた張り合い関係を示さないで、ときには、直線的な構造を示したり、対立的要素を欠く孤立的な関係を示しても、それが、「生活語彙体系」の現実であるならば、その現実をこそ重視して、そのままに示すことが大切である。そのためには、

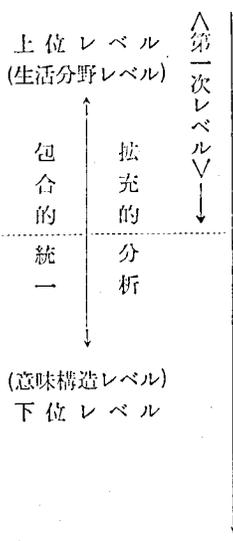
7、二項対立の関係は、生活語彙の全体にわたって、明確に認められるわけではない。

ということをも、最初に明確に認識しておくことが、なによりも肝要であろう。

以上のことをとりまとめて、簡単に図示するならば、次の頁のようになる。

現在、語彙研究、意味研究において、もっとも重視されなければならないことは、研究者相互の共通の基盤の確定であり、語彙体系帰納のための方法論の確立であろう。語彙研究、意味研究の理念、目的の確立が、それに先行しなければならないことは言うまでもない。

立体的分析



第三次レベル

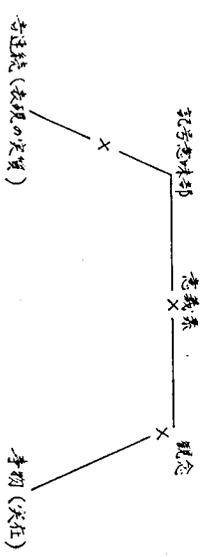
階層的構造

「フィイルドの歩み」は、青柳精三氏が主宰される「生活語研究会」の機関誌であり、第八号は昭和五〇年一二月三十一日に刊行された。

(注1) 昭和五一年五月一四日、立正大学で開催された。

(注2) L. Weisgerber: Vom Weltbild der deutschen Sprache. Dusseldorf: 1953~1954.

(注4) この意味三角図は、K. Heger と K. Baldinger の二つのついでのように修正された。



(注5) 「フィイルドの歩み」第七号巻末に付載された。

(注6) B. L. Whorf: Science and Linguistics. 1964.

(注7) A. Schaff: Langage et Connaissance, suivi de six essais sur la philosophie du langage, traduit du polonais par C. Brendel, éd. Anthropos.

(注8) 青柳精三「八丈島の潮流語彙」(東京教育大学文学部紀要(西洋文学)昭和四八年三月)

(注9) 室山敏昭「鳥取県気高郡気高町姫路ことばのカゼの語彙」(「フィイルドの歩み」第六号、昭和四九年)

(注10) 関本至「言語の学の基底にあるべきもの」(「方言研究年報」第十八巻所収、昭和五〇年)

(注11) 山口幸洋「新居の浜のことは——漁業語彙の世界をさぐる——」(「文芸あらい」創刊号、室山敏昭「漁業社会の魚名語彙」(「国語と国文学」第五四巻第二号、昭和五二年二月)

(注12) 鳥取県東伯郡北条町では、「ブリ」は、「①ヒデルゴ→②サワズゴ→③ハマチ→④マルゴ→⑤ブリ」と変化する。また、鳥根県出雲地方では、「①ヒデルゴ→②サワズ→③ハマチ→④マルゴ→⑤ブリ」と変化する。北海道奥尻島では「①フクラゲ→②ミカンシ→③アオ→④ハマツイ→⑤ブリ」と変化する。さらに、三重県の熊野灘沿岸では「①セジロ→②ツバス→③ワカナ→④カテイオ→⑤イナダ→⑥ワラサ→⑦ブリ」と変えることである。

(注13) 室山敏昭「方言副詞語彙の基礎的研究」(たたら書房、昭和五一年一月)

(注14) 室山敏昭「漁業生活と潮の語彙」(「季刊人類学」第八巻第二号、昭和五二年五月)

(注15) 藤原与一「方言副詞語彙の研究」(「内海文化研究紀要」第四号、一九七一年三月)

(注16) (注15)に同じ。

(注17) 藤原与一「昭和日本語の方言」第一巻(昭和四八年四月、三弥井書店)を参照のこと。

(本学文学部助教授)